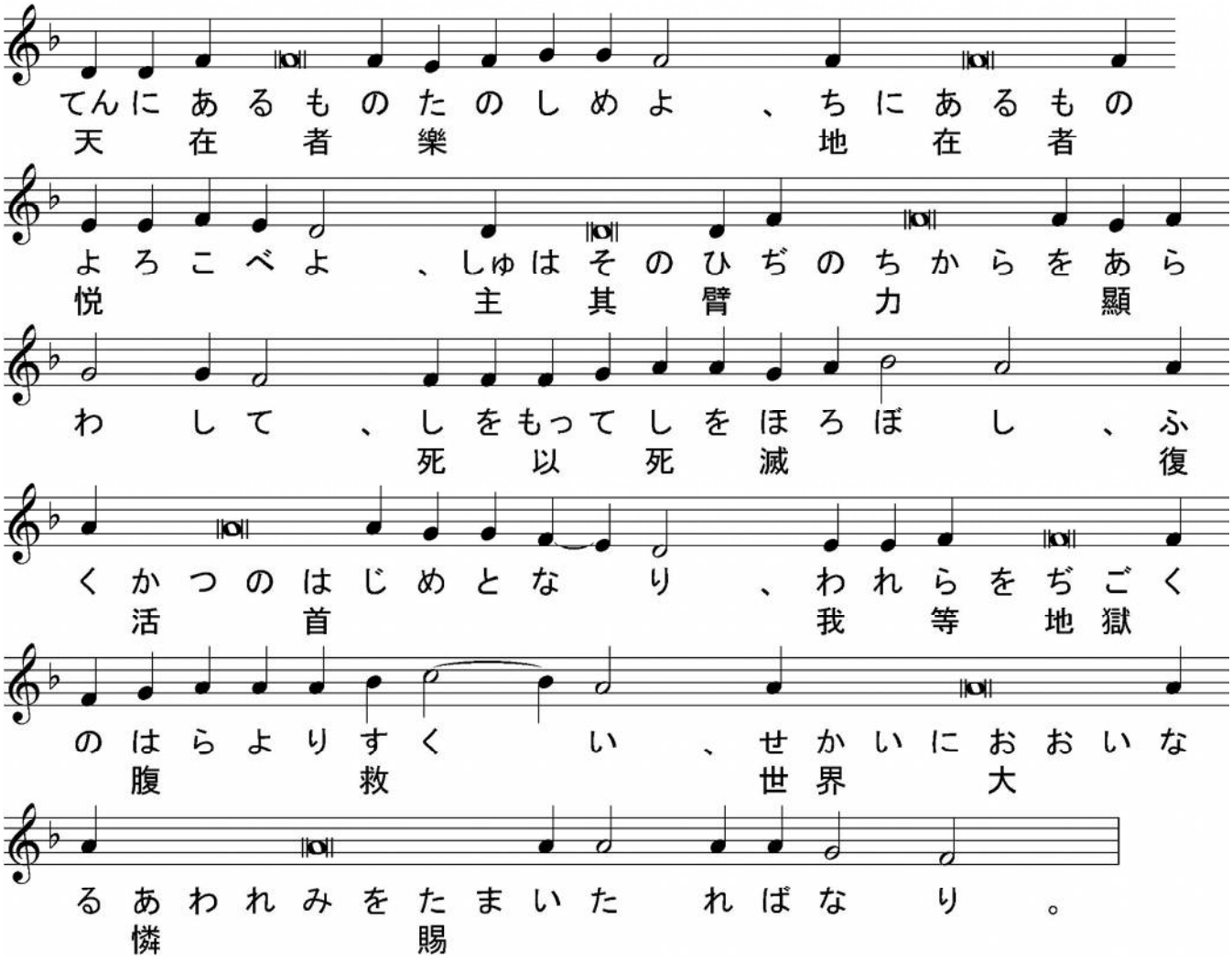
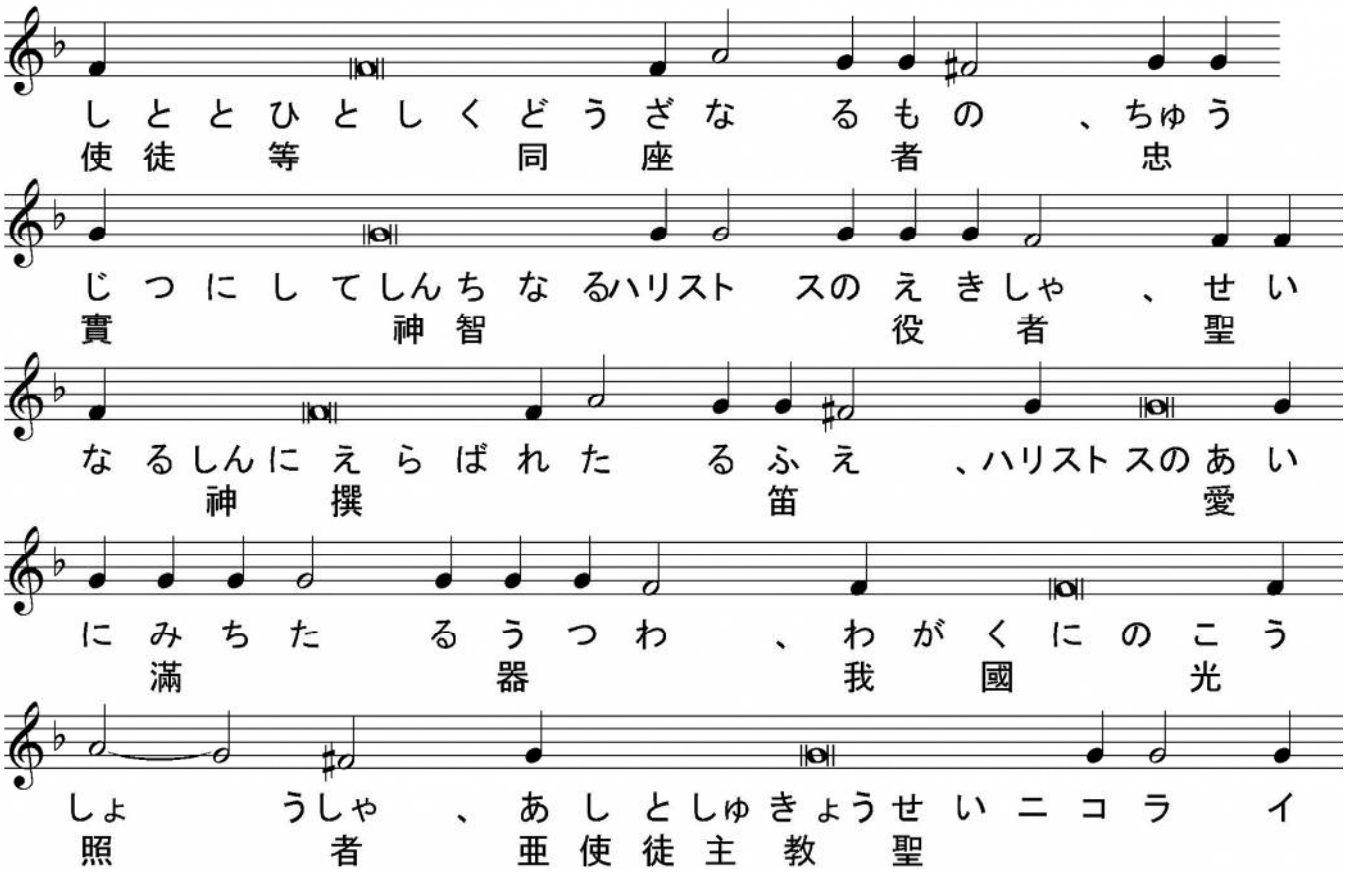
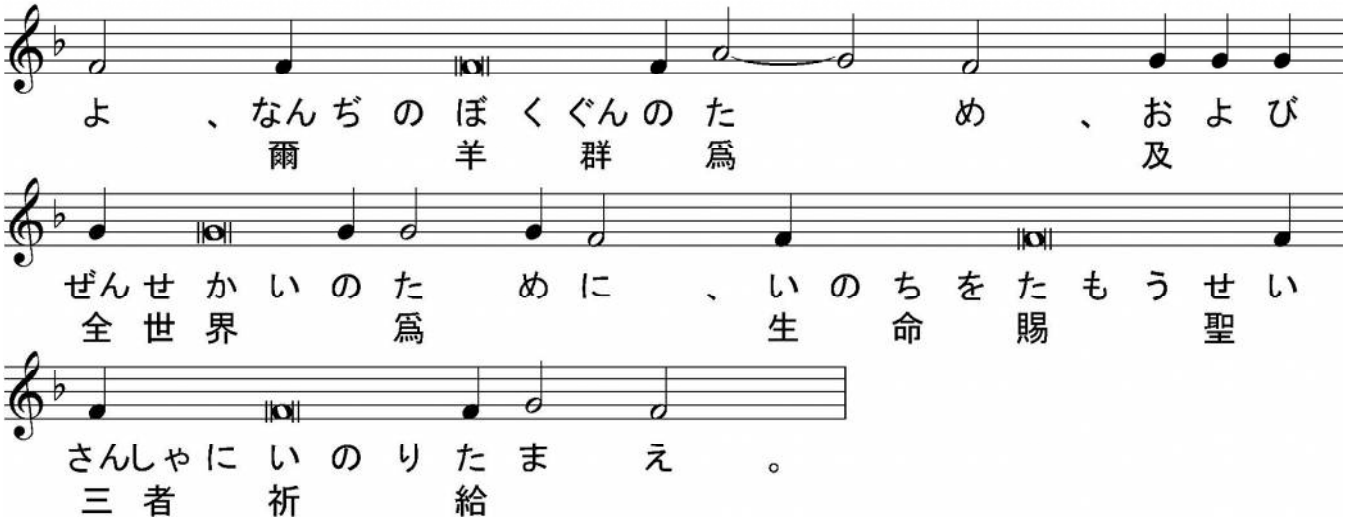
【　復活のトロパリ　第３調　】

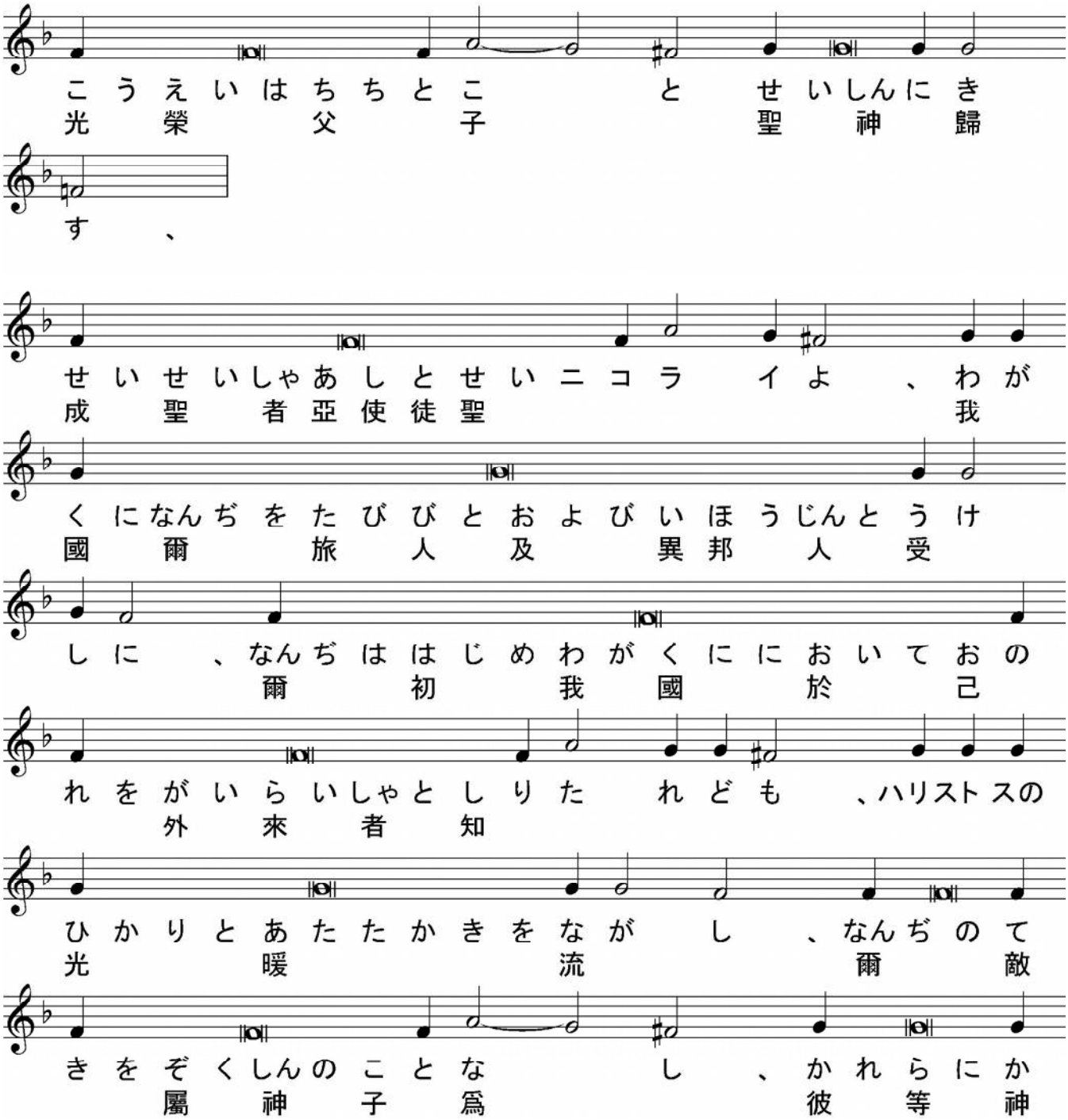


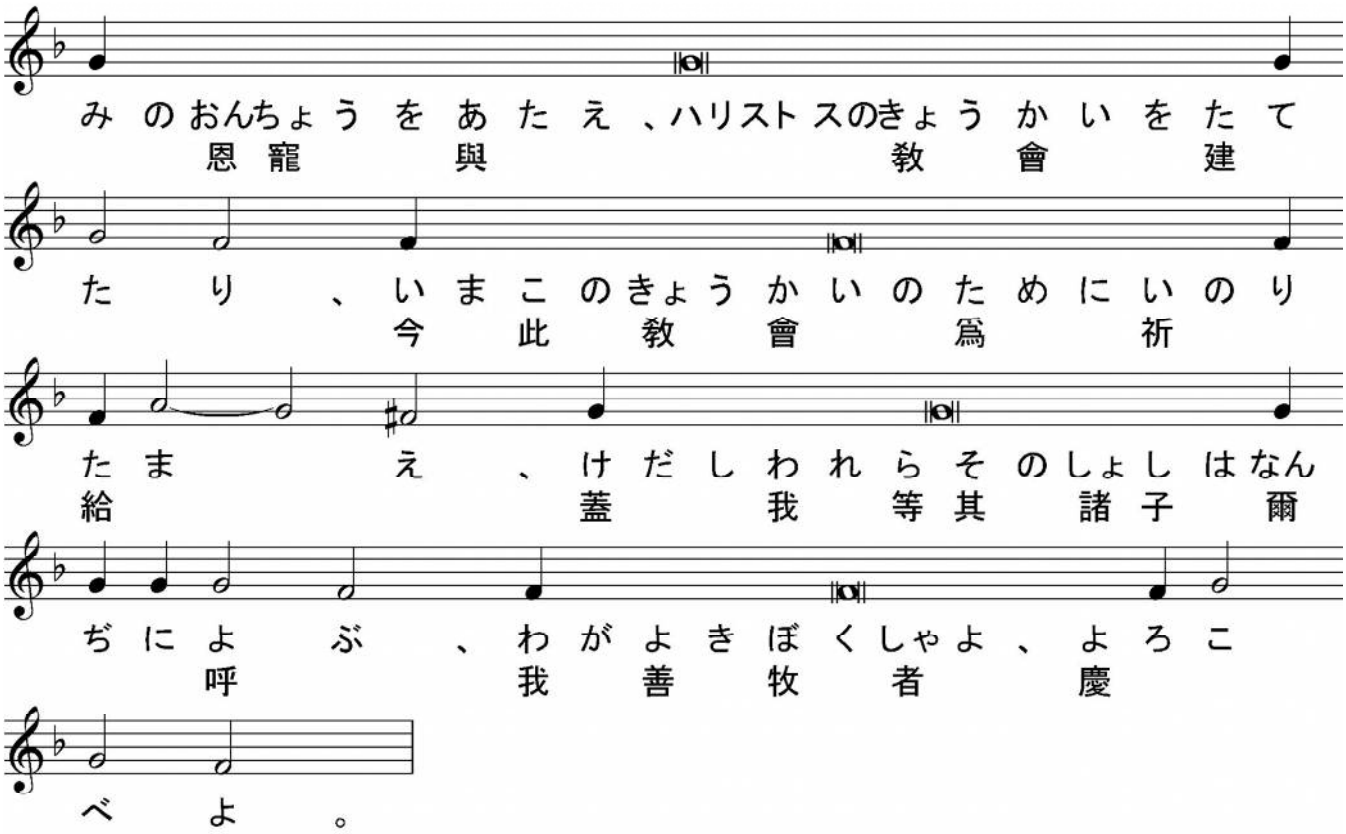
【　日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ　第４調　】



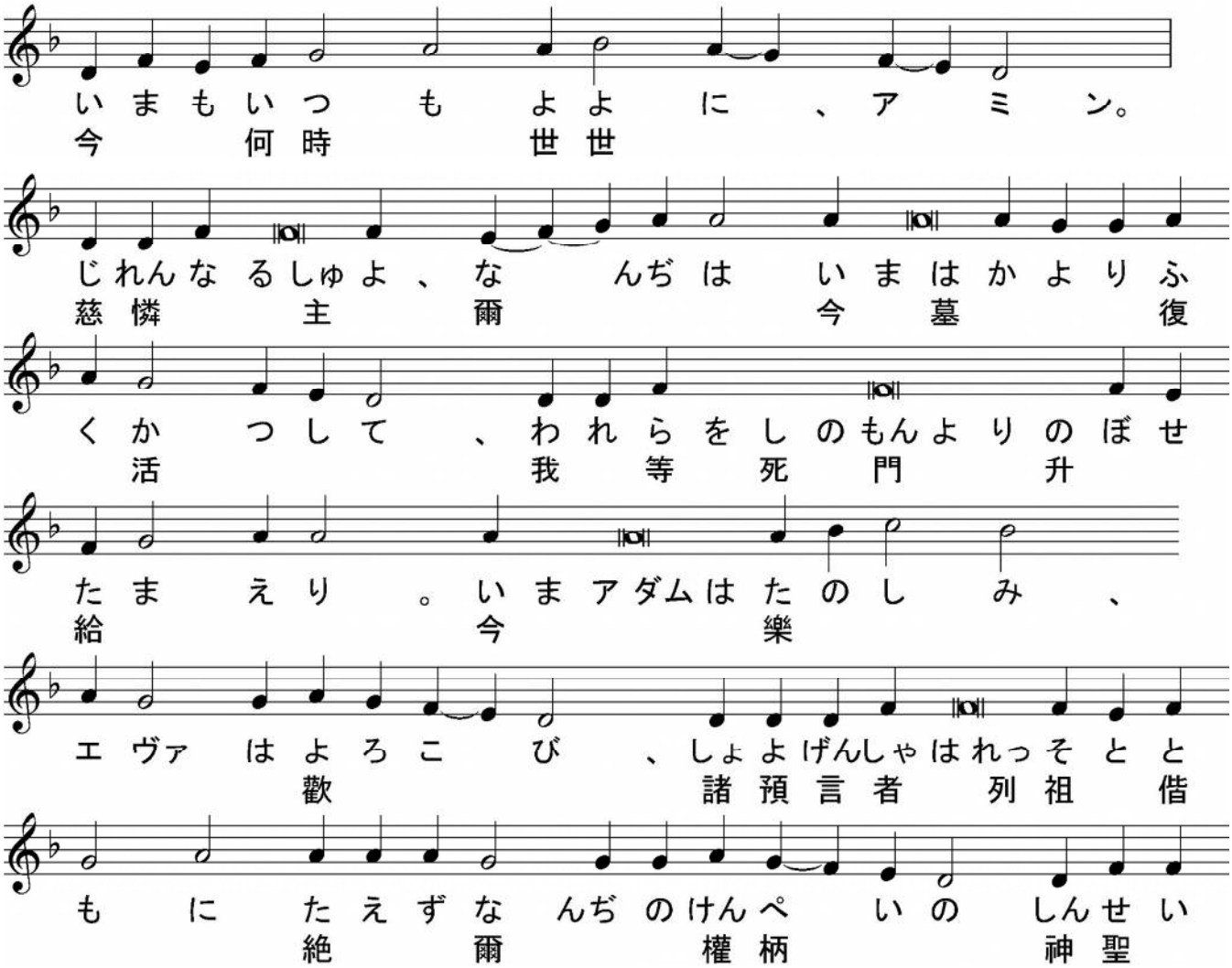


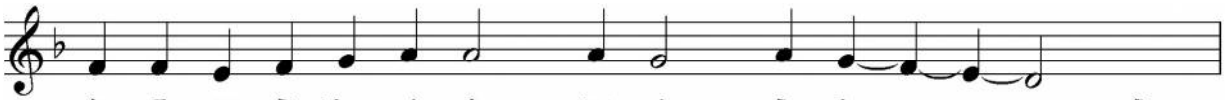
【　日本の亜使徒聖ニコライのコンダク　第４調　】




みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩寵與教會建
たり、いまこのきょうかいのためにいのり
今此教會爲祈
たまえ、けだしわれらそのしょしはなん
給蓋我等其諸子爾
ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
呼我善牧者慶
べよ。

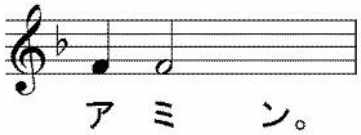
【　復活のコンダク　第３調　】


いまもいつもよよに、アミン。
今何時世世
じれんなるしゅよ、なんぢはいまはかよりふ
慈憐主爾今墓復
くかつして、われらをしのもんよりのぼせ
活我等死門升
たまえり。いまアダムはたのしみ、
給今樂
エヴァはよろこび、しょよげんしゃはれっそとと
歡諸預言者列祖偕
もにたえずなんぢのけんぺいのしんせい
絶爾權柄神聖

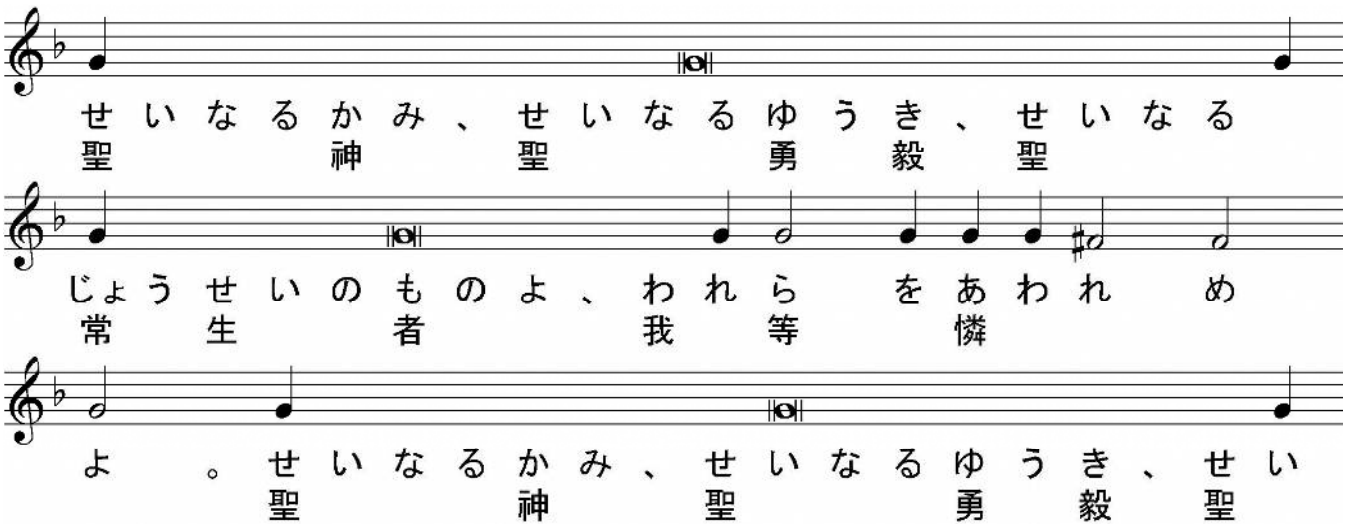


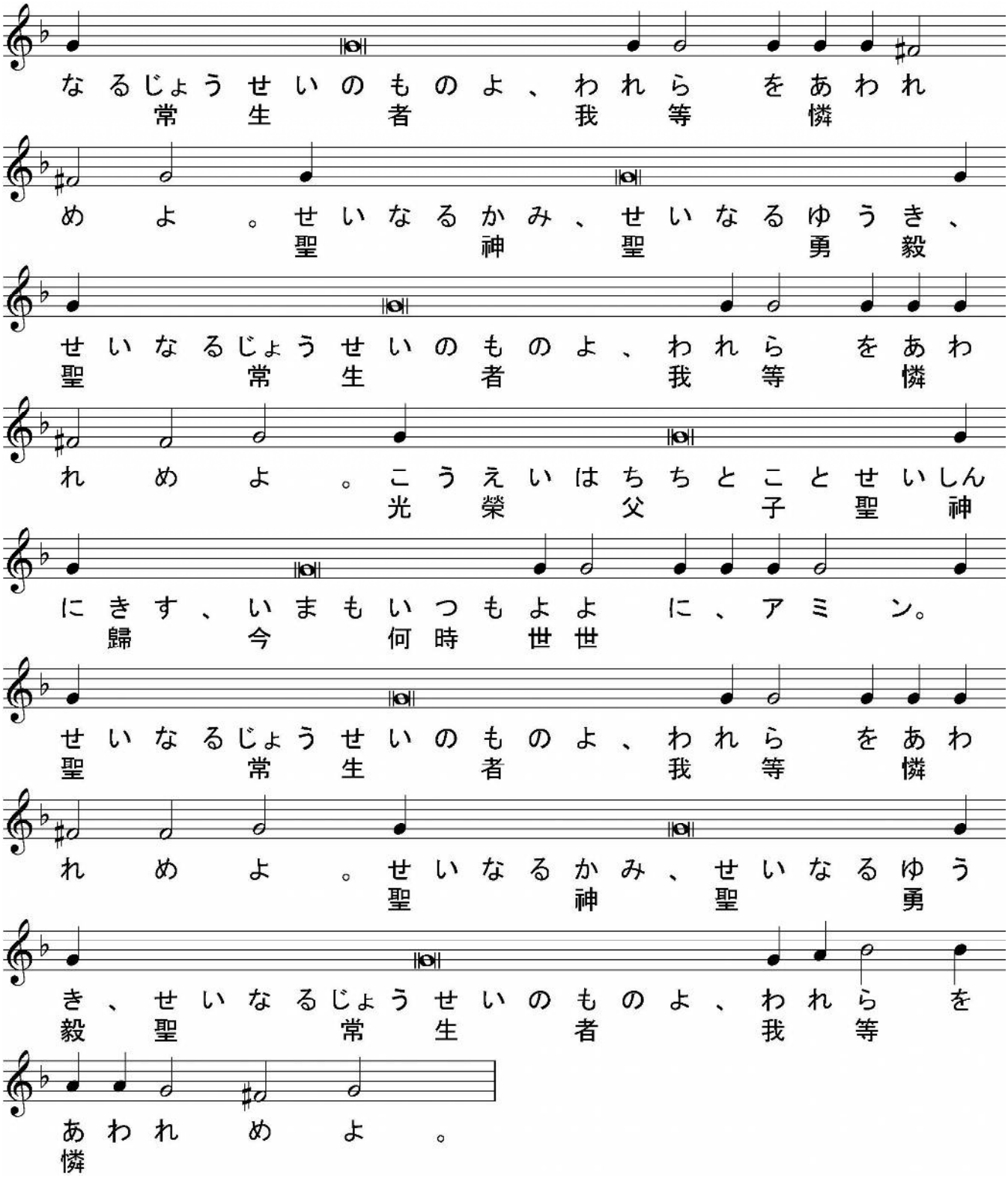
司祭）（　黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、　）

司祭）蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【　聖三祝文　】





司祭）（ 默誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 ）

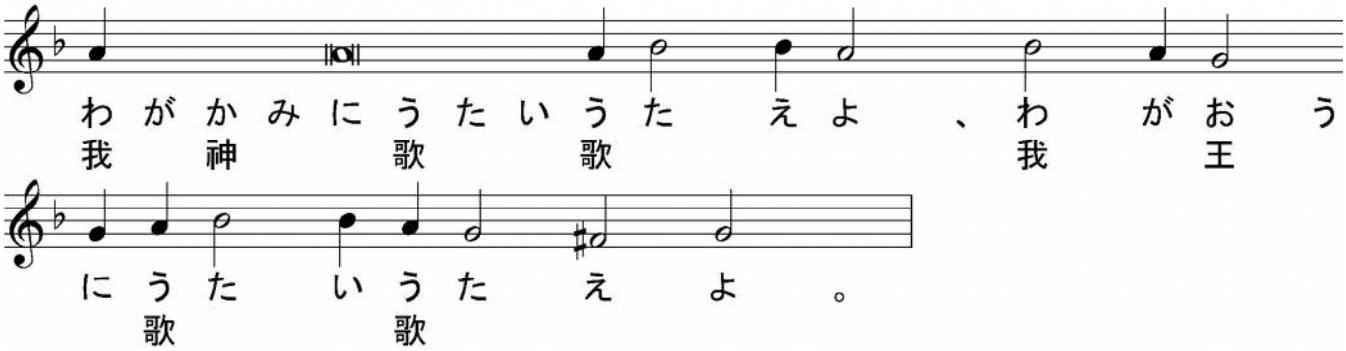
【 提綱 主日第３調 】

司祭） 愼みて聽くべし、衆人に平安、

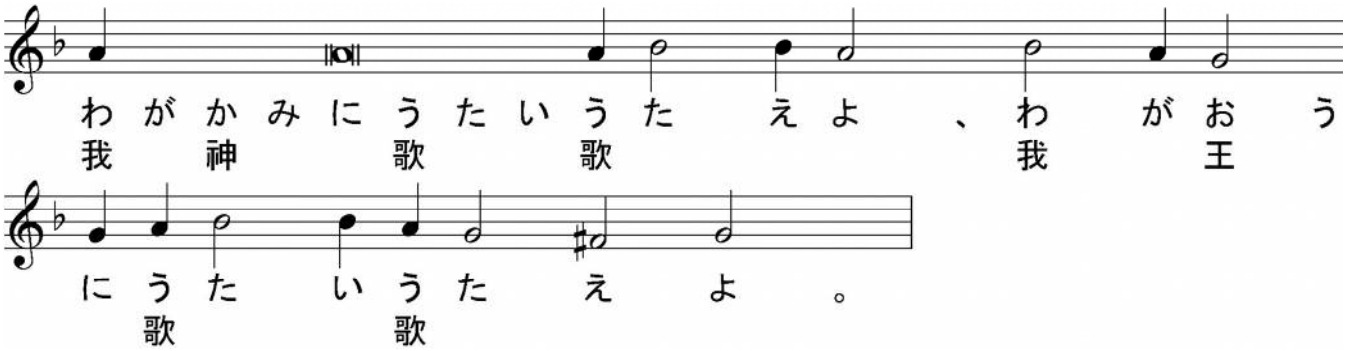
誦經） 爾の神にも、

司祭）睿智、

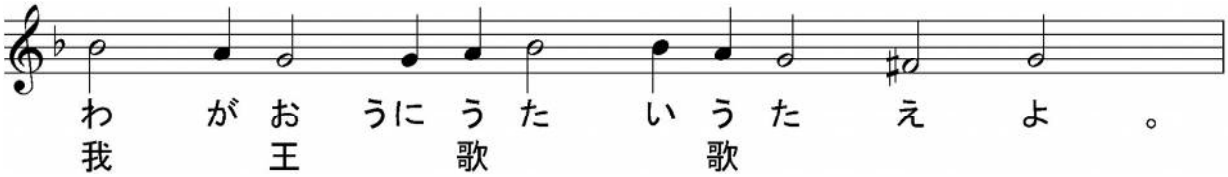
誦經）プロキメン、我が神に歌い歌えよ、我が王に歌い歌えよ、



誦經）萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、



誦經）我が神に歌い歌えよ、



【 使徒經 200端 ガラティヤ書1章11節～19節 】

司祭）睿智、

誦經）聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

司祭）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、我爾等に告ぐ、我が傳えし福音は人に由るに非ず。蓋我人より之を受け、之を學びしに非ず、乃イイスス ハリストスの黙示に由るなり。爾等は我が先にイゥデヤ教に在りし時に行いし所を聞けり、即我甚しく神の教會を窘逐し、之を殘害し、且イゥデヤ教に進歩して、我が同族の中の年相若しき多くの人に越え、極めて先祖の遺傳に熱中せり。然れども我が母の胎より我を簡びて、其恩寵を以て

我を召しし神が、悦びて、其子を我が内に顯し、我をして之を異邦人に福音せしめんとせし時、我直に血肉と相謀らず、亦イェルサリムに上りて我より先に使徒と爲りし者を見ず、乃アラヴィヤに往き、後亦ダマスクに返れり。嗣ぎて三年を越えて、ペトルを見ん爲にイェルサリムに上り、十五日間彼と偕に居たり。他の使徒は、主の兄弟イァコフの外、誰をも見ざりき。

＊＊

（比較用　口語訳）兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言っておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。そして、同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行った。それから再びダマスコに帰った。その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。しかし、主の兄弟ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。

＊＊

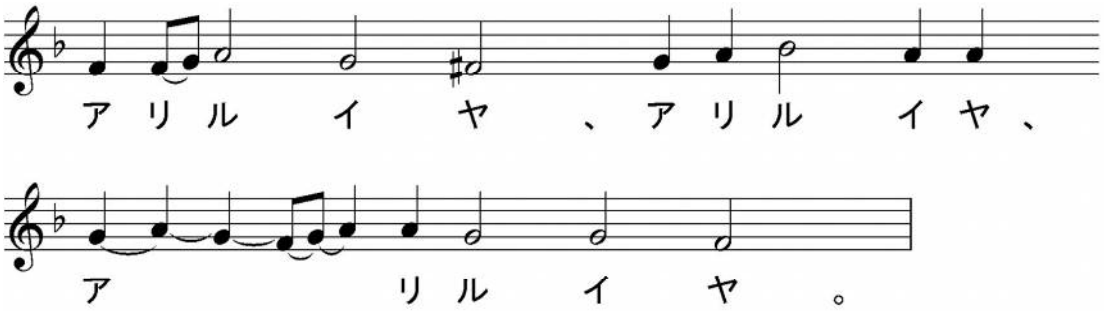
【　アリルイヤ　主日第３調　】

司祭）爾に平安、

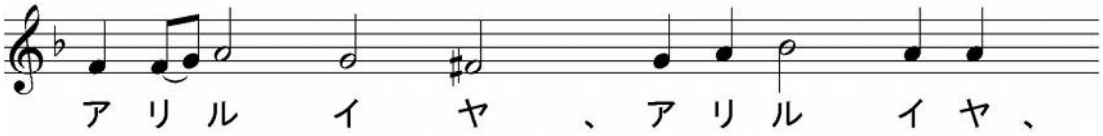
誦經）爾の神にも、

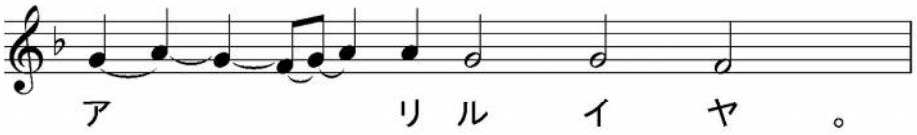
司祭）睿智、

誦經）アリルイヤ、

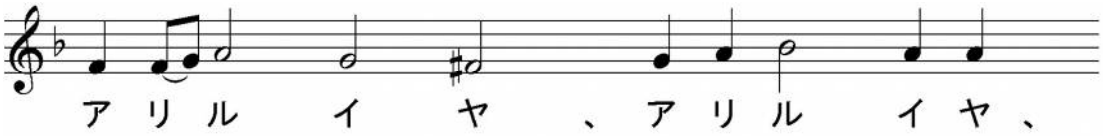


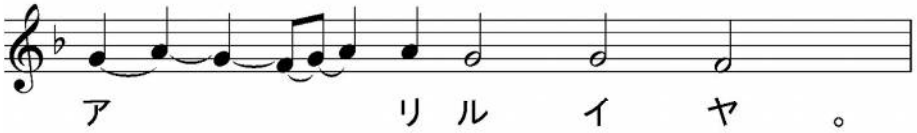
誦經）主よ、我爾を恃む、願わくは我世世に羞を得ざらん、





誦經）我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隱るるを得しめ給え、

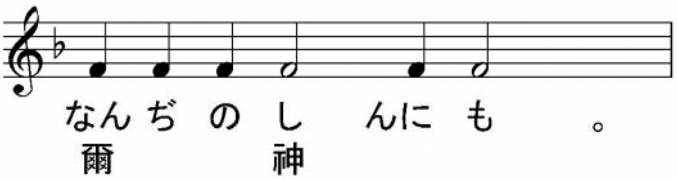




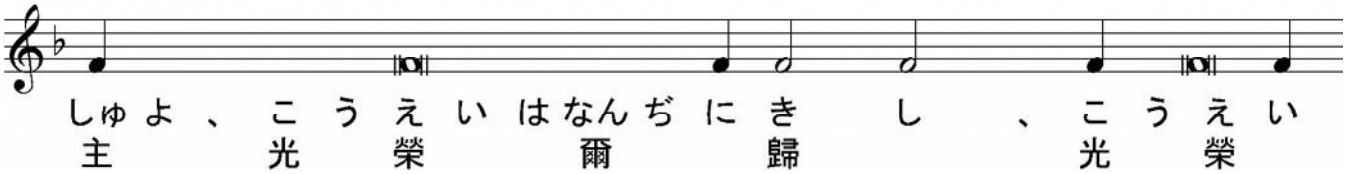
司祭）（ 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 ）

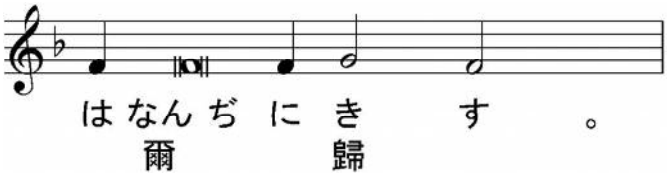
【 福音經（エヴァンゲリオン） ルカ福音書38端 8章26～39節 】

司祭）睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭）ルカ傳の聖福音經の讀、





司祭）謹みて聽くべし、彼の時イイススがガリレヤに對えるガダラの地に來りて、彼が岸に登りし時、邑の一人の者彼を迎えたり、乃久しく魔鬼に憑られ、衣を衣ず、家に住まずして、墓に住める者なり。此の人イイススを見て號び、彼の前に俯伏し、大なる聲を以て曰えり、至上なる神の子イイススよ、我と爾と何ぞ與らん、爾に求む、我を苦しむる勿れ。蓋イイススは汚鬼に此の人より出づるを命じたり、其彼を拘えしこと久しければなり。彼を守りて、鐵索と桎梏とに繫ぎたれども、彼繫を斷ちて、魔鬼の爲に野に逐われたり。イイスス彼に問いて曰えり、爾の名は何ぞ、彼曰えり、大隊、多くの魔鬼彼に入りたればなり。魔鬼はイイススに、彼等に淵に往くを命ぜざらんことを求めたり。彼處に豕の大群の山に牧われたるあり、魔鬼は彼に、其中に入るを許さんことを求めたれば彼之を許せり。魔鬼人より出でて、豕に入りしに、群は山坡より湖に逸けて溺れたり。牧う者有りし事を觀て、奔り往きて、邑及び諸村に告げたれば、人人有りし所を觀ん爲に出で、イイススに來りて、魔鬼の出でたる人が衣を着、心慥にして、イイススの足下に坐せるを見て、懼れたり。見し者は魔鬼に憑られたる人の如何に愈されしを告げたれば、ガダラ地方の民は、皆イイススに彼等を離れんことを請えり、大に懼れし故なり。彼舟に登りて返れり。魔鬼の出でたる人は彼と偕に居らんことを求めたれども、イイスス之を去らしめて曰えり。爾の家に歸りて、神が如何なる事を行いしを告げよ。彼往きて、全邑にイイススが彼に如何なる事を行いしを宣べたり。

＊＊＊

います」と答えた。彼の中にたくさんの悪霊がはいり込んでいたからである。悪霊どもは、底知れぬ所に落ちて行くことを自分たちにお命じにならぬようにと、イエスに願いつづけた。ところが、そこの山べにおびただしい豚の群れが飼ってあったので、その豚の中へはいることを許していただきたいと、悪霊どもが願い出た。イエスはそれをお許しになった。そこで悪霊どもは、その人から出て豚の中へはいり込んだ。するとその群れは、がけから湖へなだれを打って駆け下り、おぼれ死んでしまった。飼う者たちは、この出来事を見て逃げ出して、町や村里にふれまわった。人々はこの出来事を見に出てきた。そして、イエスのところにきて、悪霊を追い出してもらった人が着物を着て、正気になってイエスの足もとにすわっているのを見て、恐れた。それを見た人たちは、この悪霊につかれていた者が救われた次第を、彼らに語り聞かせた。それから、ゲラサの地方の民衆はこぞって、自分たちの所から立ち去ってくださるようにとイエスに頼んだ。彼らが非常な恐怖に襲われていたからである。そこで、イエスは舟に乗って帰りかけられた。悪霊を追い出してもらった人は、お供をしたいと、しきりに願ったが、イエスはこう言って彼をお帰しになった。「家へ帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、語り聞かせなさい」。そこで彼は立ち去って、自分にイエスがして下さったことを、ことごとく町中に言いひろめた。

＊＊＊